

発表要旨

日本の歴史学界におけるモンゴル帝国のイメージは、90年代以降大きく変わってきた。とりわけ杉山正明氏は一連の著作やメディアを通じ、モンゴル帝国イメージを刷新し、その影響は広く浸透しつつある。では国民レベルでのモンゴル襲来のイメージは、それがナショナルアイデンティティ強化に利用された戦前から今日までの間でどのように変わったのだろうか。洋画家矢田一嘯(1859-1913)のパノラマ画「蒙古襲来絵図」と最近の日本の漫画での描写を比較してみたい。モンゴル軍を描く画像・映像で目に付く特徴は、先進的な火薬兵器の描写である。特に近年は専門研究で、その時代に存在したことが証明されていないような種類の火薬兵器を、モンゴル軍がすでに実用化していたかのように描かれている。

モンゴルは中央アジア・ホラズム朝征服からバグダード進攻の過程で、堅固な城壁に囲まれた都市を攻略するが、その過程で様々な兵器を導入し、さらには南中国遠征に際しては、水軍も創設された。モンゴル帝国は中国やホラズムなど征服の過程で各地の様々な技術(と技術者集団)を吸収していったことが知られる。それは軍事技術においても例外ではない。本発表では、未解決の問題が多いモンゴル帝国の火薬兵器使用について今の時点でどのように評価できるのか、文献や考古学など様々な面から考察してみたい。

略歴

1974年11月21日、福岡県北九州市生。京都市在住。1993年3月、福岡県立京都高校卒業。1998年3月、大阪大学文学部史学科(東洋史学専攻)卒業。2001年3月、大阪大学大学院文学研究科(文化形態論専攻)博士前期課程修了。2003年～2005年、中国・北京大学歴史学系留学。2007年3月、大阪大学大学院文学研究科(文化形態論専攻)博士後期課程修了。2007年～2012年、大阪大学大学院文学研究科特任研究員。帝塚山大学(2007～2013年)、関西大学(2010～2013年)、甲南大学(2011～2013年)等非常勤講師。2013年4月～現在、同志社大学グローバル地域文化学部准教授。

主要著作:

「二章 モンゴル・シーパワーの構造と変遷 The Structure and Transition of Mongol Sea Power」『グローバルヒストリーと帝国 (Global History and Empire)』, 秋田茂 Akita Shigeru, 桃木至朗 Momoki Shiro 編 eds., 大阪大学出版会 (Osaka University Press), April-2013, pp.71-106.

「元代“朝貢”与南海信息 (The Tribute Trade in the Yuan Dynasty and Information about Nanhai Countries at Yuan Court)」『元史論叢 (Yuanshi Luncong)』10 (中国元史研究会 Zhongguo Yuanshi Yanjiuhui), July-2005, pp.389-406.

“The Interests of the Rulers, Agents and Merchants behind the Southward Expansion of the Yuan Dynasty,” 『吐魯番學研究—第三屆吐魯番學暨歐亞游牧民族的起源與遷徙國際學術研討會論文集— (Journal of the Turfan Studies: Essays on The third International Conference on Turfan Studies The Origins and Migrations of Eurasian Nomadic Peoples)』(上海古籍出版社 Shanghai Guji Chubanshe), May-2010, pp.428-445.

“‘Muslim Diaspora’ in Yuan China: A Comparative Analysis of Islamic Tombstones from the Southeast Coast,” *Asian Review of World Histories*, Vol. 4(2), July-2016, pp.231-256.

(http://www.thearwh.org/journal/ARWH_4_2_Articles/arwh_4_2_Mukai.pdf)